

1900～1910年代における「韓国の美術」に関する一考察

(八木奘三郎の調査と論考を中心に)

東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期過程
全 東園

・既存研究の流れ

植民地期朝鮮における遺跡・遺物研究は、朝鮮総督府の植民地政策の一環として行われた。しかも、現在の文化財に値する、その遺跡・遺物の研究に朝鮮人の関与が一切許されないまま、解放(敗戦)を向かうことになった。朝鮮人を遺跡・遺物研究に参加させなかった主な理由として、「民族の歴史を具体的に明らかにすることをとびこえて、それを民族の優秀性の証明ということにつかわれる」¹可能性が高いからという指摘がある。周知のように、朝鮮総督府の植民地政策の根幹を成しているのは同化政策である。

こうした植民地朝鮮における遺跡・遺物に関する状況は、朝鮮総督府の調査事業に参加した日本人学者らにより、早くも5・60年代を通して日本の学界に紹介された。主に、考古学界を中心に展開された彼等の朝鮮遺跡・遺物研究に関する論考は、考古学が目指す実証的、科学的な調査に重点が置かれていた。ところが、その根底に流れているのは学者としての純粋な学問に対する熱情であり、朝鮮総督府の半島に残した「世界に誇るに足りる第一の記念事業」²であるとの考え方であった。

一方、戦後の日本歴史学・社会科学の重要な課題として位置づけられていた、日本帝国主義に対する批判と反省の研究が繰り広がる中で、植民地における日本帝国主義の個別的な研究も行われるようになる。そのうち、日本の朝鮮遺跡・遺物研究に関して、とくに注目すべきは西川宏の「日本帝国主義下における朝鮮考古学の形成」(『朝鮮史研究会論文集』7集、1970年)である。西川は、日本の「官学アカデミー」が日本帝国主義の朝鮮侵略と共に朝鮮に「浸出」し、武断政治期までの時期に行った朝鮮遺跡・遺物調査は、純粋な学問的だったとはとはいいがたく、むしろ朝鮮総督府の植民地政策と密着した形で行われたとした。上述の植民地支配を肯定するような論考に対し、厳しい批判を下したのである。

韓国の歴史学界においては、1990年代以降、それまで主流とされてきた政治・経済史以外の社会史、文化史、民衆史等へと研究領域が広がり、そのうち日本の朝鮮遺跡・遺物研究に関する研究も続々発表されるようになった。その研究をテーマ別に分類すると、1)日本の朝鮮文化財搬出に関する研究、2)博物館を中心にする研究³、3)植民地期文化財の法制史に関する研究⁴、4)朝鮮総督府の古蹟調査事業に関する研究⁵に分けられる。日本の朝鮮文化財搬出に関する研究は、解放後から耐えずに報告されており、その実態の解明もある程度の成果を見せていると思われ

¹ 三上次男の発言；「朝鮮の考古学研究」『シンポジウム日本と朝鮮』勁草書房、1969年

² 藤田亮作「朝鮮古文化財の保存」『朝鮮学報』第1輯、1951年5月

³ 全京秀「韓国博物館史における表象の政治人類学」『国立民族学博物館研究報告』24巻2号、1999年；陸秀玄『日帝下博物館の形成とその意味』ソウル大学修士論文、2000年(曷수현「일제하 박물관의 형성과 그 의미」서울대석사논문、2000년)

⁴ 吳世卓「植民地朝鮮に対する日帝の文化財政策 - その制度的側面を中心にして」『考古学研究』452、1998年

⁵ イスンジャ『日帝強占期古蹟調査事業研究』淑明女子大学博士論文、2007年(이순자 일제강점기 고적조사사업 연구 속명어 대학사논문2007년)

る。そのほかの研究は、より具体的な植民地期の実状の解明に根を下ろしながら、近年の研究動向である植民地性・近代性とかかわる認識枠組みで進んでいる。ところが、こういった植民地期朝鮮の遺跡・遺物の状況をめぐる近年の研究は、細分化されつつあるものの、依然として朝鮮総督府の植民地政策、とくに文化財政策の植民地性・近代性を明らかにするところに重点が置いてある。

日本でも、近年韓国歴史学界の研究動向に共鳴する研究も出てはいるが⁶、主流とは言えず、むしろ、考古学界を中心に、植民地期朝鮮で直接遺跡・遺物の調査研究に当たった研究者個人に重点を置いて展開されている⁷。ここで重要なのは、彼等の残した日本考古学の科学的、実証的成果であり、朝鮮半島だけでなく、彼等のフィールドに合わせた日本を含む東アジア全域を視野に入れた成果である。そこには、韓国でいうような日本の遺跡・遺物研究が残した植民地性は触れずに進んでいる。

・問題認識

私は、既存の研究を踏まえ、日本の朝鮮遺跡・遺物研究にかかわる一連の事項を「朝鮮文化財」の歴史と捉え、「朝鮮文化財」の形成過程を追うことにした。上述したように、日韓両国の研究者の間には、日本の遺跡・遺物研究をめぐる視点からも大きな隔たりが存在することが確認できる。つまり、韓国においては、朝鮮総督府(あるいは日帝)の植民地政策の一環として視点であり、日本においては学者個人に焦点を合わせて学問的な、とくに考古学的成果のみを扱う視点である。

そこで、抜け落ちているのは、日本の朝鮮遺跡・遺物研究そのものの特質であり、またどういった構造を持っているのかである。これを明らかにしない限り、植民地期に生まれた「朝鮮文化財」の歴史を正しく把握することができない。日本人の独占した遺跡・遺物研究が時期別にテーマ別にどういう構造及び特徴を持っているのか、そこからどういう思想(美術認識・「朝鮮文化財」像)が生み出されたのか、また、それが朝鮮総督府の一連の政策にどれほど反映されたのかを問わなければならない。

1、はじめに

・本稿における問題の所在

冒頭で言及したように、日本の朝鮮遺跡・遺物研究は朝鮮総督府の植民地政策の一環として行われたが、その出発点は、1902年の東京帝国大学から派遣された建築史家関野貞の調査から始まったとされている。まだ、韓国併合の前の時期で、日本の植民地政策の中には朝鮮遺跡・遺物研究が包摂されていない時期である。にもかかわらず、関野の調査から朝鮮遺跡・遺物研究の端緒を求めるのは、併合後においても、引き続き関野が朝鮮総督府の遺跡・遺物研究に深く関与し、また輝かしい成果を残しているからである。関野の研究が、その後の日本の朝鮮遺跡・遺物研究に一つの方向を決めさせたことは間違いないだろう。

そこで、私は、韓国併合以前の時期を日本の遺跡・遺物研究の草創期と位置づけている。この時期は、関野の調査も含めて植民地期を通して行われた日本の朝鮮遺跡・遺物調査に大きな影響を与える幾つかの端緒があるからである。関野の調査だけで日本の遺跡・遺物研究の草創

⁶ 李成市「コロニアリズムと近代歴史学—植民地統治下の朝鮮史編修と古蹟調査を中心に」『植民地主義と歴史学—そのまなざしが残したもの』刀水書房、2004年；外村大「朝鮮総督府の古蹟調査保存事業と朝鮮民衆」『コロニアリズムと「朝鮮文化」』、2005年

⁷ 早乙女雅博「関野貞の朝鮮古蹟調査」『精神のエクスペディション』東京大学出版社、1997年；高橋潔「関野貞を中心とした朝鮮古蹟調査行程」『考古学史研究』9号、2001年5月、同「朝鮮古蹟調査における小場恒吉」『考古学史研究』10号、2003年

期を語り、その後の方向性まで決めるということは少し一律な考え方ではないかと思ひ、もっと複雑な構造があると信じるからである。そこで、まず、関野を派遣した東京帝国大学の韓国調査に注目した⁸。併合後の遺跡・遺物研究が日本人の手によって行われたとしたが、日本人とっても東京帝国大学の研究者や出身者等が中心になって進められたのである。「官学アカデミー」と呼ばれるわけであるが、このような特徴もすでに朝鮮遺跡・遺物研究の草創期に形成された。

そして、この時期、東京帝国大学から派遣されたのは、関野だけではない。本稿で扱う八木 奘三郎である。彼の足跡を追うことにより、日本の朝鮮遺跡・遺物研究草創期における構造及び思想の一面を考察することが本稿の目的である。現在まで、八木の韓国調査に関する全貌は明らかにされておらず、ただ 高正龍⁹によって行われた調査行程の確認ぐらいである。

・八木の評価

清野謙次：「考古学者としての八木氏の業績は草創の学者としてである。日本において最初の日本考古学を著はしたし、台湾に在りし時間こそ短かけれ、朝鮮に於ては総督府博物館設立以前、既に幾多の考古学的土俗学的の研究報告を行って居る。満州考古学1冊はまた満州に於ける初期考古学の著作として永久の価値がある。要するに、日清、日露の両戦役を経て帝国の勢威が是等地方に拡大して、考古学の研究史が伸展すると共に、最初の研究者として現はるるものの中に、必ず八木氏が在った」¹⁰

→考古学者として、日本、朝鮮、満州考古学の先駆者としての八木

2、八木奘三郎における大韓帝国(以下、韓国)調査の背景と目的

1) 派遣に際しての時代背景

→日清戦争後、急激に高まる朝鮮への関心

：とくに、歴史学界の朝鮮史研究開始(文献中心、古代の研究)

→東京帝国大学人類学教室における朝鮮の人類学的調査の必要性も台頭

：「日本石器時代人種論争」の延長からアイヌ、琉球、朝鮮へ拡大

：人類学的調査の目的で八木の派遣決定

「理科大学人類学教室員八木、人類学的調査の爲め韓国へ出張を命ぜられたり」¹¹

※八木に派遣を命じたのは東京帝国大か人類学教室か

→東京帝国大学理科大学人類学教室の名の下で行われたとされているが、実は人類学教室独自で実施した派遣であった(公式文書の不在、八木の書簡から推測、八木の身分)

2) 人類学教室の具体的な目的

・坪井正五郎の意図：『世界風俗写真帖』(坪井正五郎編、1902年12月刊行)の編纂目的

→1901年1月15日附きの『東京朝日新聞』の公告

：目次で「アイヌ、琉球、台湾、韓国、支那、馬來群島、南洋諸島等」の記載

⁸ 未発表論文「東京帝国大学の『大韓帝国』学術調査に関する考察-東京大学の設立から1910年まで」

⁹ 高正龍「八木奘三郎の韓国調査」『考古学史研究』第6号、1996年11月

¹⁰ 清野謙次「先進考古学者としての八木奘三郎氏」八木奘三郎著『改訂増補満州考古学』荻原星文館、1944年、pp676-677

¹¹ (雑報)「韓国に於ける人類調査」『東京人類学会雑誌』175号、1900年10月

→八木の書簡から「研究方面は(坪井)先生の御指定」¹²を受けたことを確認
→2回にかけて調査を行った理由(刊行の延期及び朝鮮調査地域の経路から推測)
→八木の主任務の一つ：写真撮影と送付の記録
→『世界風俗写真帖』の「総説」
「台湾部の編成につきては前述の鳥居氏より、韓国部につきては彼地を跋渉されたる人類学教室員八木奘三郎氏より、いづれも談話を聞き、若くは記述を需めたり」¹³

・人類学教室陳列室の展示のための蒐集

→当時、人類学教室では、付属標本陳列室の増設を企画しており、そのうち1室を外国古物陳列室として埋めることを定めていた¹⁴

→八木の古器旧物の買収及び送付の叙述

「今回の旅行は必ず朝鮮物にて一室を要し候位に集め候心組に候」¹⁵

3) 八木の意図

→八木の関心：考古学への傾斜

「偶ま明治三十年機内地方の調査に際し、我邦ほど古蹟、古物の多き所なく、此材料を握って研究すれば、確かに一頭地を抜くことが出来ると信じ、遂に斯学問に進むことに決心」¹⁶

→人類学的調査と共に、自分の関心を持つ考古学的調査も開始

「予は素素人類考古歴史等の学問上より我天孫人種の故地を探り兼て両国の関係点を事実上より研鑽せんと欲し、多年内地の遺跡遺物を探討せしが其結果として韓国調査の必要を認め之を坪井理学博士を謀りて彼地渡航の便を得たり」¹⁷

「小生の主眼と致候古墳関係の遺物は図らざる点より、到着の日直に古今無比の優等品を一見仕候」¹⁸

→調査後に残した考古学的論考が証明

⇒東京帝国大学人類学教室の人類学的調査目的と、八木個人の関心を持つ考古学的目的の混合

⇒日本の朝鮮半島における最初の人類的考古学的調査

3、八木奘三郎における「韓国の美術」¹⁹論(1900-1905)

1) 韓国調査の経路

・高正龍「八木奘三郎の韓国調査」(『考古学史研究』第6号、1996年11月)を踏まえて

¹² 八木奘三郎「韓国通信」『東京人類学会雑誌』177号、1900年12月

¹³ 坪井正五郎「総説」坪井正五郎編『世界風俗写真帖』、1902年12月

¹⁴ (雑報)「人類学標本陳列所の増設」『東京人類学会雑誌』169号、1900年4月

¹⁵ 同上、八木「韓国通信」『雑誌』177号

¹⁶ 八木奘三郎「明治考古学史」『ドルメン』第4巻6号、1935年6月、p12

¹⁷ 八木奘三郎「韓国探検日記(1)」『史学界』4-4、1902年4月

¹⁸ 八木奘三郎「韓国通信第1信・第2信・第3信」『東京人類学会雑誌』176号、1900年11月

¹⁹ 八木奘三郎は「韓国の美術」という題で1905年まで5回に渡る投稿をしている。(「韓国の美術」『時事新報』1902年1月1日；「韓国の美術につきて」『考古界』1-8、1902年1月；「韓国の美術」『国華』169、1904年6月、「韓国の美術」『考古界』4-2、1904年7月；「韓国の美術1-3」『日本美術』73-77、1905年)

・地図参考

⇒特徴：ゼネラル・サーベイ（一般調査：全体的調査）

2) 八木の発表した朝鮮遺跡・遺物研究論文とその特徴

・全体の論考から

(表1) 八木奘三郎の発表した論文(1901－1905年)

八木奘三郎	韓人の間に行はるる冠り物の種類	人類学雑誌16－181	1901年4月
八木奘三郎	韓国京城論	考古界1－1	1901年6月
八木奘三郎	韓国に現存する日本の古城蹟	歴史地理3－7	1901年7月
冬嶺	日韓古史断に載せたる古器物評	考古界1－2	1901年7月
八木奘三郎	韓国探検報告(其の1)－韓人の衣食住と冠婚葬祭	人類学雑誌16－185	1901年8月
八木奘三郎	韓国古代の陶器模様	人類学雑誌16－185	1901年8月
八木奘三郎	韓国考古資料通信	考古界1－6	1901年11月
八木奘三郎	韓国の美術	時事新報	1902年1月1日
八木奘三郎	韓国の美術につきて	考古界1－8	1902年1月
八木奘三郎	韓国の王宮	国士	1902年1月
八木奘三郎	韓国仏塔論	考古界1－8, 1－9	1902年1, 2月
八木奘三郎	朝鮮に於ける古器及び土俗品	時事新報	1902年3月23日
八木奘三郎	朝鮮に於ける古器に就て	大日本窯業協会雑誌116号	1902年4月
八木奘三郎	八木奘三郎君の朝鮮考古談	考古界1－11	1902年4月
八木奘三郎	韓国探検日記(1, 2)	史学界4－4, 5	1902年4, 5月
八木奘三郎	韓国里程標	人類学雑誌17－194	1902年5月
八木奘三郎	韓国男女写真図解	人類学雑誌19－216	1904年3月
八木奘三郎	韓国の美術	国華169	1904年6月
八木奘三郎	韓国の美術	考古界4－2	1904年7月
八木奘三郎	韓地の撐石	人類学雑誌20－229	1905年4月
八木奘三郎	韓国の美術1－3	日本美術73－77	1905年

→幅広い関心領域、調査対象の概要を取りまとめた叙述

：i) 人類学的・考古学的調査の混合、ii) 短期間におけるゼネラル・サーベイの限界

iii) 八木の研究領域の模索期 ⇒一冊の本としてまとまらなかった理由

3) 八木の朝鮮遺跡・遺物研究

・仏塔論

i 韓国の仏塔の分布

→踏査地域の仏塔の所在を紹介

→これは「僅に其一端に過ぎずして寺院の廢墟、及び現存の大寺は概して仏塔を有せり」²⁰と書いた。さらに、日本人が朝鮮の各地で仏塔を探す場合は、その数の多さに驚くだろうとしたうえで、仏塔の存否を知るためには各道にある『群誌』を参考にすればいい

²⁰八木奘三郎 「韓国仏塔論」 『考古界』1－8、1902年1月

と付け加えている。

⇒ その後、建築史家関野貞による精密に調査

⇒ 植民地期、日本民間人による仏塔蒐集ブームに影響

ii 仏塔の時期区分及び評価

→ 第1期：古塔(中国唐代)、第2期：高麗塔、第3期：朝鮮塔

「古塔尤も単純にして第二期の高麗に入りては紋様を施せる風を生じ、第三期の李朝に進みては復旧に返りて而も雄大の風を吹ける」²¹

：根拠— 京城のパゴダ公園内にある「蠟石塔」²²

→ 朝鮮最高の「実に国宝の一に数ふべき価値」²³、「高麗時代の絶品」²⁴

※ 幣原坦の批判²⁵、関野貞によって崩れると同時に「京城廢大円覚寺石塔婆」²⁶と命名
⇒ 朝鮮芸術衰退論、高麗時代(918-1392)を半島芸術の絶頂期と認識

iii 朝鮮・日本・中国の仏塔比較

→ 伊藤忠太や岡倉覚三による中国の仏塔研究を吸収

⇒ 大陸と日本をつなげる朝鮮仏塔の特徴(東洋仏塔の関係)

・古墳

i 日韓併合後、古墳研究の主要拠点となる地域を紹介

「古物遺跡の如きも黄海平安の二道は今日の人口希薄なるが如く古昔も甚だ少なりしと見へてとんと大古墳を見ず一方は開城近辺に留り一方は平壤近くに限らるゝが如き現象有之候而して慶尚道は割合に多く各地共存在致候」²⁷

「将来考古学的に詳密なる調査を遂げ度は第一が三南にして余力あれば猶西北にも速ばし候方可然と被存候」²⁸

⇒ 古墳の分布状況と調査すべき地域を言及

ii 平壤の大同江周辺における古墳(楽浪調査の端緒)

→ この地域の瓦の特徴から「遼東よりかけて大同江の沿岸に」²⁹まで及んだと認識

→ 清野謙次「之れ(瓦・磚)は南部地方に見ざりしもので、八木氏は支那式墳墓だと断じた。後年楽浪の漢代古墳の発見は実の所八木氏に初まって居る」³⁰と評価

⇒ 楽浪調査は植民地期を通して朝鮮総督府の重要古蹟調査事業として位置づけられる

：派手な遺物の出土、大陸との関係解明(他律性の一つの根拠へ)

²¹ 八木奘三郎「韓国仏塔論」『考古界』1-9、1902年2月

²² 現圓覚寺址十層石塔；国宝2号

²³ 八木奘三郎「韓国考古資料通信」『考古界』1-6、1901年11月

²⁴ 八木奘三郎「韓国の美術につきて」『時事新報』1902年1月1日付

²⁵ 幣原坦「京城塔洞の古塔に関する諸記録に就いて」『東洋学芸雑誌』255、1902年12月

²⁶ 関野貞「韓国京城廢大円覚寺石塔婆」『考古界』3-4、1903年9月

²⁷ 「韓国短信・坪井先生」『東京人類学会雑誌』16-178、1901年1月

²⁸ 「八木氏よりの韓国通信」『人類学雑誌』17-189、1901年12月

²⁹ 八木奘三郎「台湾に於ける考古学的觀察」『考古界』3-9号、1904年2月

³⁰ 同上、清野「先進考古学者としての八木奘三郎氏」、p643

iii 撐石(ドルメン)の紹介

- 「韓国に於ける遺跡中にて石器時代の物を除きて此物最古の遺跡」³¹と位置づけ
- ⇒その後の先史時代遺跡調査の流れに端緒を提供³²

iv 古墳の分類

- ①撐石、②高麗塚、③後高麗の古墳、その他、靺鞨塚、煉化塚の命名³³
- ⇒その後、消滅

・陶磁器

→ 陶磁器の分類

- ①歴史的分類(第1期：新羅焼、第2期：高麗焼、第3期：朝鮮焼)
- ②技術的分類(素焼、釉焼)

→沿革の説明：古代から朝鮮時代まで

「韓国の陶器中美術品の部類に入る可きは青磁、白磁、象眼入りの三種」³⁴

※江戸時代以来、高麗磁器に対する美意識は存在(愛好家の趣味)

※ 山吉盛義『古高麗痕』 畫報社、1900年9月

- 「皆之れを朝鮮の古陵残墳より掘出タルカ若しくは幾多の桑溟山崩れ谷洗って自然に現出シタル其物を拾得したるを以て(中略)就中石棺の内より発見シタルものは多くは其形其質両から損所なく、釉料と云い花紋と云い依然として原象を存せり」

→東京帝室博物館への展示

「山吉盛義氏が韓国に蒐集せる高麗青磁等の出品は二百点余の多に及び³⁵」「第一室は例の山吉盛義氏出品の朝鮮古陶器を以て充され」³⁶

⇒学術の対象として朝鮮の陶磁器を分析、高麗磁器を美術品として認識

⇒文献上及び観察力だけで論じたのが限界(陶磁器研究の出発点)

⇒その後の瀬戸古窯址調査(1910年)と李王家博物館在職時の研究成果

⇒陶磁器研究者小山富士夫：古陶磁の研究方法を古窯址の発掘調査に着眼及び実行した
開拓者として高く評価³⁷

・城郭論

→日本の「神籠石論争」の関心から：靈域説・城郭説

→位置により ①山城、②半山城、③平城、の三種に区分

「世界の諸地方に存する城郭は国により古今に従て其制同じからずと雖も其新なるものは往古の制に比して進歩せるは各国略等しきが如し、(中略)旧くは馬韓時代より近く李朝

³¹ 八木装三郎「韓地の撐石」『人類学雑誌』20-229、1905年4月

³² 鳥居竜蔵「朝鮮金海貝塚の下部に発見せる石棺」『人類学雑誌』37-12、1922年12月；小田省吾「平南龍岡郡石泉山のドルメンに就いて」『朝鮮』114、1924年10月；榎本亀次郎「大邱に於けるドルメンの調査」『歴史公論』6-8、1927年6月；藤田亮作「大邱大鳳町支石墓調査」『昭和11年度古蹟調査報告』1927年7月

³³ 「八木装三郎君の朝鮮考古談」『考古界』1-11、1902年4月

³⁴ 八木装三郎「韓国の美術」『考古界』4-2、1904年7月

³⁵ 「東京帝室博物館の新陳列品」『考古界』1-9、1902年2月

³⁶ 「博物館の美術模本陳列」『朝日新聞』明治35年7月14日

³⁷ 小山富士夫「八木装三郎先生の業績」『陶磁』10-2、東洋陶磁研究所編、1938年7月

に至るまでの城跡を見るに、其変化有るは僅に位地の異なる点に過ぎずして全体の構造は—も進歩の見る可きものあるを知らず（中略）故に韓人の城郭に対する観念を推察するに土地の形勢を選むと云う一点にのみ注意して他は別に省みざりしもの如し」³⁸

4) 「韓国の美術」論

・八木の朝鮮観

→朝鮮の歴史を熟知：「聞慶滞在中に憲兵隊の為に朝鮮史を二回講じた」³⁹

→当時の朝鮮史観を拾得：国学の伝統ひく朝鮮史像(日鮮同祖論)

「慶尚道は東方日本の感化を受る事多き為に」⁴⁰

「慶尚道は日本的にして忠清以北は高麗的に候」⁴¹

「本邦に於ける祝部風の製陶術は韓地の伝来なりとは何人も異議なき説なれ共、前期の如く素焼類の彼地に存するを見ば、右は日本より教授せし風と謂て宜しからん」⁴²

→朝鮮印象：

「彼等の生活状態を一見致候が其不潔醜陋なる殆ど驚くばかりに御座候」⁴³

「韓国の寺は不潔甚だしく又畳とてもなければ土敷の上へ紙張にせしのみ過ぎず」⁴⁴

平壤の水運に触れて「彼等は場合に於て野蛮人だにも若かざる幼稚の風あるかと被考候」⁴⁵

京城の「蠟石塔」のある場所に関しては、「韓国に似合はぬ美しき場所」⁴⁶

・韓国の歴史と美術

→「韓地の美術品は我邦に比して云はば、三韓時代は応神帝以前の如く其の存否を確定す可き品なく、三国より新羅統一の世は古墳時代に推古朝を加味せしかの観あり、高麗に至りては純然たる寧楽七朝を見るの思ひあり、而して李朝に入りては本邦の見るが如き平安、藤原、鎌倉等の変化なく、僅に朝鮮式の余喘を保つに過ぎず」⁴⁷

→「三国時代は少年より成丁に達する意気旺盛の趣きを示し、新羅の統一より高麗の治世は大人の思慮周密の所置を執れるが如く、李朝に逮んでは全く老衰の観を呈せり」⁴⁸

→さらに、美術品を三つに区分（陶器・鑄金・石刻）

⇒八木の朝鮮観の反映、福田徳三の停滞論的要素

4、「李王職博物館」在職時の足跡(1913—1917)

1) 李王家博物館での足跡

³⁸ 八木契三郎「韓国京城論」『考古界』1-1、1901年6月)

³⁹ 同上、清野謙次「先進考古学者としての八木契三郎氏」、p 641

⁴⁰ 八木契三郎「韓国探検報告(其の1) —韓人の衣食住と冠婚葬祭」『人類学雑誌』16-185、1901年8月

⁴¹ 同上、八木「韓国通信」『東京人類学会雑誌』177号

⁴² 八木契三郎「韓国古代の陶器模様」『人類学雑誌』16-185、1901年8月

⁴³ 同上、八木「韓国通信第1信・第2信・第3信」『東京人類学会雑誌』176号

⁴⁴ 同上、八木「韓国通信」『雑誌』177号、1900年12月

⁴⁵ 八木契三郎「八木蒔田両氏よりの韓国通信」『人類学雑誌』17-188、1901年11月

⁴⁶ 八木契三郎「韓国考古資料通信」『考古界』1-6、1901年11月

⁴⁷ 八木契三郎「韓国の美術」『時事新報』1902年1月1日付

⁴⁸ 八木契三郎「韓国の美術」『考古界』4-2、1904年7月

- ・1912年頃、『朝鮮陶磁器史』の著述
 - 早稲田講師桂湖邨の依頼(李王家委託のもの)
 - 1年間費やす、未出版、稿本の行方も分からない
- ・高島多米治(歯医者・民間収集家・東京歯科大学教鞭)の推挙
 - 李王職次官小宮三保松に採用(伊藤派)
 - 1913年6月李王家博物館赴任：小宮の在職期間中在鮮(当時の風習)
- ・李王家博物館での初仕事
 - 平壤方面、古墳壁画刊行準備中、その解説を担当
 - 関野貞との見解の違い、壁画発掘方法などで厳しく攻撃
 - (「関野とは相容れぬ者となった」⁴⁹⁾)
 - 1913年12月～翌年1月：扶餘と慶州の視察(精査できなかった地域)
- ・陶磁器及び古窯址の研究
 - 朝鮮初期の陶磁器研究(高麗焼は遠慮、李王家博物館主任末松熊彦)
 - 全国に渡る古陶窯址調査：
 - 「李朝初期の刷毛目・絵高麗・三島刷毛目の製作に就て明らかとなった」
 - ←一方、その地域一帯の窯址は骨董商の乱掘する所となる
- ・その他、李王家博物館刊行物にも関与
 - ⇒李王家博物館在職時の業績は、小宮三保松と末松熊彦の名で公表

2) この時期、八木の論考

(表1) 1913年以降、発表した朝鮮関係論文

八木奘三郎	韓族の南風北俗	朝鮮及満州73, 74	1913年8月、9月
八木奘三郎	楽浪と帯方	朝鮮及満州76, 79	1913年11月、1914年2月
八木奘三郎	朝鮮発見の曲玉	人類学雑誌29-1(321)	1914年1月
八木奘三郎	シナの南北画より見たる朝鮮の絵画	朝鮮及満州81	1914年4月
八木奘三郎	扶余地方発見の古墳と水門(正・続)	人類学雑誌29-4, 9	1914年4月、9月
八木奘三郎	朝鮮の磨石器時代	人類学雑誌29-12	1914年12月
八木奘三郎	再び朝鮮曲玉を論ず	人類学雑誌30-3	1915年3月
八木奘三郎	朝鮮の曲玉	朝鮮及満州102	1916年1月
八木奘三郎	朝鮮の石戦風習	人類学雑誌32-1	1917年1月
八木奘三郎	西鮮の蹟跡と王陰城(1, 2)	朝鮮及満州118, 121	1917年4月、7月
八木奘三郎	考古学上より観察せる朝鮮(1)	朝鮮及満州127	1918年1月
八木奘三郎	日本伝来の糸印と高麗の古印	朝鮮及満州133	1918年7月
八木奘三郎	シナ満鮮間の作像研究	東亜8-6	1935年6月

⁴⁹⁾ 同上、清野謙次「先進考古学者としての八木奘三郎氏」

八木奘三郎	朝鮮咸鏡北道石器考	人類学叢刊 乙1	1938年7月
八木奘三郎	南朝鮮古窯調査報告 (正・続)	陶磁10-2、11-3	1938年7月、1939年9月
八木静山 (奘三郎)	朝鮮古陶磁器・陶窯譚 (1, 2)	ドルメン4-9, 10	1938年11月、12月
八木奘三郎	朝鮮の先史民族	歴史教育13-10	1939年1月

・特徴

①考古学、とくに以北地方の先史時代の遺跡・遺物研究への傾斜

→先史時代研究の流れに一定の影響を与える (民間人の研究にも)

②朝鮮陶磁器及び古窯址の調査担当

むすびにかえて

人類学教室の朝鮮派遣は、明らかに日本帝国主義の範囲内に入った地域への進出であるため、根本的には朝鮮の情報収集という側面がつよい。その役割を担っていたのは東京帝国大学を中心とする「官学アカデミー」であった。そのなかでも研究部門ごとに派遣の目的は存在する。人類学教室からの派遣目的は人類学的資料収集にあったが、八木は範囲を広げて考古学的調査まで行うことになった。ところが、その調査経路からも分かるように人類学的調査の目的は、短期間で朝鮮全域を調査するところにあつたため、八木の考古学的調査もゼネラル・サーベイに止まるしかなかった。より深層的な調査はできなかったものの、八木は直接見聞した朝鮮遺跡・遺物に関する論文を関連の学術雑誌に投稿する学問的情熱を見せ付けた。

八木の調査は、実証研究に基いて行うことを目指し、ときには日本の朝鮮研究者が文献のみに頼ることに対して強い警告を発することもあった⁵⁰。こうした実証研究に基いた考古学的研究姿勢は、その後の朝鮮遺跡・遺物研究に従事する考古学界の学者たちに受け継がれるようになる。実際に彼の影響を直・間接的に受けたと思われる人として、鳥居龍蔵、浜田耕作、今西龍などといった植民地期の朝鮮遺跡・遺物研究の主役たちが含まれている。朝鮮半島における実証的・科学的な考古学的研究の実体は、八木から始まったといえる。また、八木が幾つか残した論考は歴史的経緯と関連遺跡・遺物の分類に力を入れていることから分かるように、専門的な学術書というよりむしろ概説書に近いところがあった。ところが、こうした概説書の存在が、その後の朝鮮遺跡・遺物研究の方向を一つの指針になったこともいえるだろう。

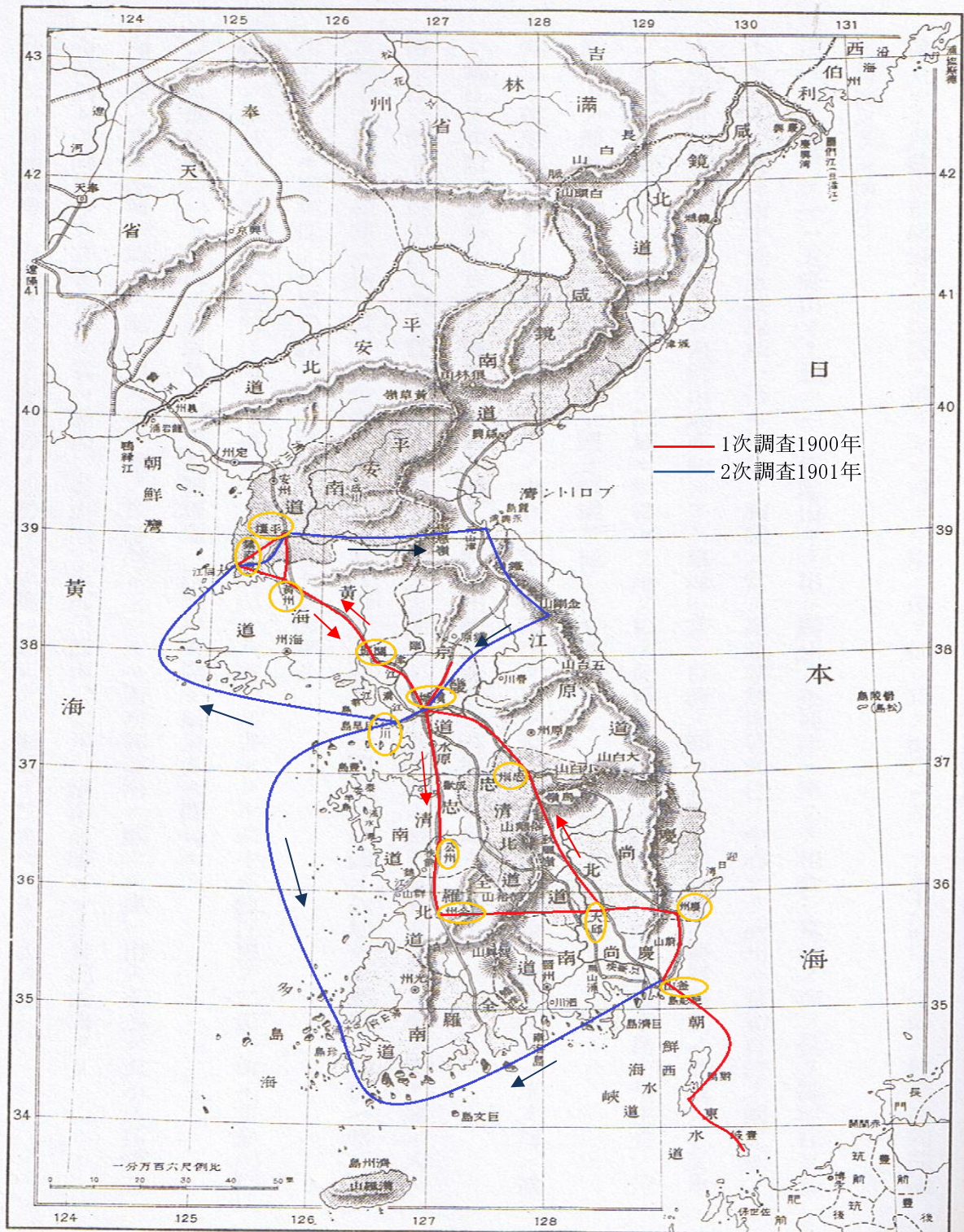
しかし、このようなのちに続く学問的な傾向と共に、八木は「韓国の美術」の像も生み出した。当時の日本の歴史観と朝鮮観をそのまま「韓国の美術」に投影させたのである。歴史上に照らして「韓国の美術」に裁断を下したのも八木から始まり、時代別の美術の優劣を分けたのも八木からであった。しかも、日鮮同祖論、停滞論、他律性論などといった植民地期総督府が植民地政策を敷く上で役に立つ視点は、日本の朝鮮遺跡・遺物研究が植民地政策として組み入れられる以前の時期に、八木によって生み出されたのである。その後、高麗時代を美術の絶頂

⁵⁰ 八木奘三郎「日韓古史断に載せたる古器物評」『考古界』1-2、1901年7月 (吉田東伍『日韓古史断』に対する批評)

期として位置づけたことに対しての修正は行われるものの、こうした「韓国の美術」の認識も、植民地期を通じて耐えずに日本人によって再生産されることとなる。

こうした八木の残した朝鮮遺跡・遺物に関する考古学的傾向や認識が、植民地期を通してどのように受け継がれ、また変容されていくのかは次の課題として残すこととする。

第一圖 韓國地圖



八木奘三郎の韓国調査経路(関野貞『韓国建築調査報告』東京帝国大学、1904年を調整)